

令和5年11月17日(金)

音楽会

18日(土)

西東京市立保谷第二小学校

音楽会実行委員長 藤山 和可(音楽専科)

つなげよう さかせよう わたしたちのおんがくかい 見どころ・聴きどころ

～「わらべうた」の教材性・意図について～

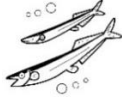
「わらべうた」とは、主にうたと遊びが一体となっているもので、まだゲームもない時代に、子どもたちが自然発生的に、創り出し、口承されてきたものを指します。大人が作曲した童謡とは異なるものです。日本各地に、たくさんのわらべうたが存在しますが、離れた場所でもなぜか似た歌詞や旋律で共通の遊び方が存在します。また「なべなべ」のように関東と関西では言葉のイントネーションは違うので、同じうたでも、抑揚が違う点は興味深いことです。遊びの種類は、まりつき、お手玉、縄跳びのように、数えながら歌う数えうた、おまじないのように唱えながら歌うオニ決め、しぐさ、役交代、お手合わせ、手遊び、かやり遊び、門くぐり、人当て、人垣、問答遊び、減り増える遊びなど、豊富にあります。異年齢・複数で遊ぶためルール性があり、人との関わり方や社会性、思いやりも自然に学んでいました。オニはソロ(一人)で歌うため、主役体験、リーダーシップが育つとともに、自立して歌う力が育ちます。児童の発達段階に応じて、遊び方も変えることができ、正に生きた教材となるのです。

音楽教材としてのよさは、五音音階で半音がないため、子どもの声帯に自然で負担がなく、遊びながら単旋律を繰り返すことで、耳、肺、身体感覚などが育っていきます。まずは、たくさん身体を動かして遊び、曲の全体像を感じ取ります。たっぷりと遊んだ後に、音楽の理論として意識化していきます。つまり、拍感、リズム感、音程感覚、強弱、音色、形式など、コンパクトに凝縮されている音楽の要素を抜き出し、少しずつ認識しつつ、らせん状に練習を繰り返して、身に付けていきます。やがては、合唱や合奏の基盤となっていくのです。はじめは楽譜やピアノは使わずに単旋律に集中するので、聴く力が高まります。覚えたわらべうたの中からモチーフを取り出すため、記憶力も不可欠で、リズム打ち、ハンドサインなど、マルチタスクな活動へと応用していきます。これらの活動を集団で行うことで、無意識のうちに、自然に音楽の要素が身に付いていくのです。

今、子どもたちを取り巻く環境は、日々、変化しており、子どもたちが自発的にわらべうた遊びをする姿はほとんど見られなくなりました。授業でわらべうたを子どもたちに返していくことで、地域とつながり、音楽性を高め、主体的に考える力、想像・創造する力なども伸ばしていき、将来、様々な音楽を理解し、心豊かな人生を送るための基礎作りができるように尽力していきたいと考えています。



1年



1. わらべうた

「なべなべ」「いものにたの」クオドリベ

「こうもりっこ」しっぽ付け

2. 合奏「メリーさんの羊」

3. 斉唱「青い空に絵をかこう」

初めて触れたわらべうた遊びの楽しさを丸ごと全身で表現します。「なべなべ」は、かやり遊びという手と身体をねじってひっくり返る動きが難しくも楽しい遊びです。数え歌は、歌いながら数の概念を自然に覚えていったのでしょうか。2曲を重ねる「クオドリベ」というスタイルで歌います。「こうもりっこ」は、夕方、薄暗くなり、寒さを感じる頃、うちで子守りをしながら留守番をしている子どものさびしい気持ちが詞からも読み取れる大変美しい歌です。終わりのフレーズを重ねるしっぽ付けで、しっとりと歌います。

合奏「メリーさんの羊」は、行進曲風の明るく元気なイメージの楽曲です。鍵盤ハーモニカに木琴、鉄琴、打楽器が入り、拍の流れに乗りながら、気持ちを合わせて演奏します。

斉唱「青い空に絵をかこう」は、未来へ向かって進んでいく子どもたちの力強さを歌っている名曲です。

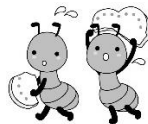
2年

1. 京都のわらべうた

「こんこんちきちき」「ヨイサッサ」

2. わらべうたメドレー「虫かごリズム」

3. 合唱奏「虫のこえ」文部省唱歌



京都の祇園まつりのわらべうたとお盆の提灯をかつぎながら町内を練り歩く祭りうたを重ねて歌います。祇園まつりを聴いて育つ子どもたちは、「♪こんこんちきちき～」と歌いながら、家の前で遊んでいたのでしょうか。門くぐり遊びは、エンドレスに続く子どもたちのマイクロコスモス（小宇宙）です。そこに、提灯をかつぎ練り歩く「ヨイサッサ」の声が、遠くから重なって聴こえてきます。わらべうたは、自然、生き物、天体、祭事などの日本の文化がたくさん含まれています。ここでは、秋らしく虫のわらべうたを集めて「虫かごリズム」としました。

文部省唱歌「虫のこえ」は、明治43年に発表され、現在も第2学年の歌唱共通教材として歌われています。ちんちろりん、りんりん、きりきり、がちゃがちゃ、すいっちゃんなど、日本人の音のセンスが凝縮された擬音を、ここでは打楽器でも表現します。主旋律は鍵盤ハーモニカ、対旋律はオルガン、ベースはバスオルガン、伴奏はシロフォンで演奏をします。

3年

1. 沖縄のわらべうたメドレー

「あっとめ」「あんがまため」「ゆさんでい」「あみまよ」

2. 外国のうた

「はるだよ」

「ゆうぐれの」

「すみれ」

3. 合奏「トルコ行進曲」



沖縄のわらべうたのメドレーを歌います。民話の世界とつながる「あっとめ」や「ゆさんでい」、お天気を祈る「あっとめ」など、物語と音楽を合わせて一緒に覚え、思いを馳せて歌います。

外国のうた「はるだよ」「ゆうぐれの」では、歌いながら動作を付けていく「ボディーオスティナート」、手で階名を示す「ハンドサイン」、歌いながらリズムを打つ「リズムオスティナート」など、音楽の要素を感じ取るソルフェージュ活動をたくさん取り入れました。「すみれ」は、ひっそりと咲く清楚な花をイメージさせるア・カペラ二部合唱です。

合奏「トルコ行進曲」(ベートーヴェン作曲)は、昨年、トルコの「メヘテルハーネ」の拍を感じながら、太鼓やシンバルでリズム伴奏を付けて、アクティヴ・リスニング鑑賞で学んだ感覚を生かして、心を一つにして合奏します。

4年

1. 合唱「地球をつつむ歌声」

2. 合唱「こきりこのたけは」

3. 合唱奏「こきりこ節」(五箇山民謡)



合唱「地球をつつむ歌声」は、医師・音楽療法士の故日野原重明先生の作詞です。純粋に歌うことや平和の素晴らしさを高らかに歌い上げます。

「こきりこ節」は、わらべうたの源流でもある民謡の中でも日本で最古といわれる富山県五箇山地方の民謡で、その歴史を各自で調べ学習をしました。ア・カペラ二部合唱は、五音音階の声の重なりや掛け合いが、とてもきれいなうたです。合唱奏は、ソロやソリ(少人数)のうたから始まり、こきりこ竹、棒ざさら、かね、太鼓、びんざさら踊り、ふえ(リコーダー)に、お箏を加えた編曲で、本物さながらに、素朴でありながら力強い音と動きを披露します。

5年

1. わらべうたコーラス
2. 外国の合唱「金曜ピーテルと土曜パール」
「すみれ」
3. 合唱奏「まほうのすず」



二声に編曲されたわらべうたのコーラス「じょうりぎ」を歌います。不思議なおまじないのようなオニ決めのおとも合唱になると、素敵な芸術作品になります。

外国の合唱「金曜ピーテルと土曜パール」は、仲良しの二人がクリスマスを楽しみに待つ明るい気持ちのリズムにも表れている曲です。「すみれ」は、イタリアのルネッサンス時代の曲で、ア・カペラ三部合唱の重なりが美しい曲です。

合唱奏「まほうのすず」は、モーツァルトの最後のオペラ「魔笛」から抜き出し編曲された合唱と合奏曲です。前半は、パパゲーノが鳴らす魔法の鈴を聴いてモノスタスが踊りながら歌う合唱シーン、後半は、パミーナとパパゲーノの喜びの二重奏を、ソリ（少人数）のリレーで歌います。

6年

1. 西東京市のわらべうた
2. 合唱「つばさをください」
3. 合奏「威風堂々 第1番」



西東京市のわらべうたに取り組み、ふるさと探究学習として、歴史、意味、遊び方などを学び、地域の豊かな文化・風習に触れる貴重な機会となりました。また、わらべうたは高学年の年齢の児童が遊んでいたものですので、本来の姿に近いといえます。西東京市にはたくさんのわらべうたがありますが、独自の旋律があり、豊かな地域性と文化が感じられます。

合唱「つばさをください」は、ソプラノ・アルトのオブリガードが華やかで素敵な楽曲です。

合奏「威風堂々」は、音楽教師だったエルガーが、管弦楽のために作曲した行進曲です。後に中間部の旋律に「希望と栄光の国」という歌詞が付けられ、イギリスの第二の国歌といわれるほど愛されるようになった名曲です。学校にある楽器でも、オーケストラの音色をイメージして演奏します。

